

## 詐術としての大学

—『アメリカの高等教育』の研究—<sup>(1)</sup>

### University Becomes a Fraudulent Business

—A Study to ‘Higher Learning in America’—

小谷 敏\*

Toshi KOTANI

〈キーワード〉

ヴェブレン (Veblen), 怠惰な好奇心 (idle curiosity), 高等教育と中等教育 (higher education and secondary education), エクセレンスの大学 (The university of excellence)

〈要 約〉

ヴェブレンは、『アメリカの高等教育』において、独自の大学観を展開している。彼は、大学は純粋な学理探求の場であって、実利的な関心に支配された応用的な研究教育や教養教育の類いを大学から追放すべきであると主張した。そしてビジネスマンに支配されたアメリカの大学が、実利的関心を優先することによって、学問の場としての大学を台無しにしてしまうことや、大学人がビジネスマンの詐術に加担させられることを、ヴェブレンは危惧したのである。しかし、このヴェブレンの危惧は杞憂に終わる。アメリカの大学は、20世紀に世界の学問研究を主導する立場を担い続けたからである。20世紀アメリカの大学は、国家的威信の担い手としての位置を占めていた。それ故、実利とは結びつかない純粋な学問研究の領域も、大学の庇護のもとに発展することができたのである。しかし、冷戦終結後、世界を主導する力は、国家から多国籍化した企業群へと移行した。大学もこうした企業群の歓心を買うことなしには生き延びることは困難になってしまった。そのため、基礎的な学問はいま大学から捨てられようとしている。20世紀の「国家の大学」は、21世紀に至るとヴェブレンが描いた「ビジネスマンの大学」に先祖帰りしてしまった。そしてビジネスの原理に支配されることによって、大学が詐欺まがいの代物に堕してしまうというヴェブレンの警告は、いまの日本にこそもっともよく当てはまるものではないだろうか。

---

\* 大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会学専攻

## 1. 大学人ヴェブレン

T. ヴェブレンは、『有閑階級の理論』等の著作によって生前から揺ぎない名声を築いていた。しかし、一人の大学人としてみた時にヴェブレンの歩んだ道のりは、決して平坦なものではなかった。それどころか、その華やかな名声とはおよそ不釣り合いなほど不遇なものであったとさえ言えるだろう。

1857年、ウイコンシン州のノルウエー移民の閉鎖的な開拓村に生まれたヴェブレンは、12歳になるまで英語を話すことができなかったという。しかし、ヴェブレンの輝かしい才気に期待をかけた両親は、乏しい家計のなかからヴェブレンの学費の援助を惜しまなかったのである。カールトンカレッジを卒業したヴェブレンは、ジョンズ・ホプキンス大学を経て、1884年、イェール大学で哲学博士の称号を得ている。しかし、いまだピューリタンの聖職者の影響下にあり、基本的にはWASPの世界であった当時のアメリカの大学に、無神論者のノルウエー系移民2世がポストを得ることは困難を極めたのである。就職に失敗したヴェブレンは、最初の妻エレン・ロルフとともに故郷の開拓村に戻り、7年におよぶ失意の浪人生活を送っている。

シカゴ大学ではじめて教職に就いた時、ヴェブレンはすでに35歳を過ぎていた。シカゴ大学在職中にヴェブレンは『有閑階級の理論』(1899)を著し、一躍時代の寵児となる。そして、「ジャーナル・オブ・ポリティカルエコノミー」誌の実質的な編集者として辣腕を振るったのである。しかし、20世紀に入るとアメリカの大学の支配権は、ピューリタンの聖職者からビジネスマンの手へと移っていた。「ジョン・D・ロックフェラーによって創立された」シカゴ大学が、私有財産を「成功した略奪のトロフィー」とみなし、ビジネスと詐術とを同一視するヴェブレンにとって居心地のよい場所であるはずなどなかった。シカゴ大学を追われるようにして去ったヴェブレンは、スタンフォード、ミズリー、第一次大戦下の食糧管理庁や左翼雑誌「ダイヤル」編集者の仕事等をはさん

で、ニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチと様々なポストを転々とした。そして1929年、大恐慌の年にヴェブレンは、カリフォルニア州パロアルトの山荘で、失意と孤独のうちに72年のその生涯を閉じたのである。

女性関係の度重なる不品行。大学において教師業を実質的に放擲していたこと。そして彼の著者や論文の矯激極まる論調。ヴェブレンの大学人としての不遇なキャリアは、彼自身が好んで招きこんだものであることに疑いをはさむ余地はない。大学はビジネスの論理とキリスト教の精神が支配する、いわばWASP文化の本拠地であった。マイノリティとしての出自をもつヴェブレンが、そこに違和感を覚えたとしても何の不思議もない。そして学者階級に特有の偽善も彼の忌み嫌ってやまぬところであった。「ヴェブレンにとってアメリカの大学は、プレーボーイにとってのヨーロッパの僧院と同じぐらいに快適な場所であった」(Diggins 1999, p 167)。このディギンズのことはまさに正鵠を得たもののなのである。

1918年。ヴェブレンは、「辛辣な大学批判の書」である『アメリカの高等教育』を上梓している。「完全なる腐敗の研究」と題された本書の最初の草稿は、編集者をして「この本の著者は完全に気が狂っているという印象を与えるだろう」(Dorfman 1935 = 訳, 497頁)と言わしめるほど、大学と大学人への過激な批判を含むものであった。ヴェブレンはこの忠告を入れて、全面的な書き直しの上で本書を出版した。しかし、それでもなお本書は強烈な毒を含んでいる。大学人としてのヴェブレンの地位の安定に寄与するものでなかったことは言うまでもない。

## 2. ヴェブレンの大学論

### (1) 大学とは何か

ヴェブレンは大学は、純粋な学理が追求されるべき場所であると考えていた。研究と教育とは大学人の二つの大きな仕事である。しかし、ヴェブレンが理想と描く大学において教育は、二義的な意味しかもってはいなかった。大学の主たる活動

は研究であり、教育とは次世代の研究者を育てるという以上の意味をもたない。この意味で大学においては、学生の教師に対する関係は、必然的に生徒と先生というよりはむしろ、「徒弟 (apprentice) と親方のそれに似たものになる」(Veblen 1918, p 18)。大学にとどりついた若者は、何の強制を受けなくとも、自分の取り組むべき課題をすでに知っているはずである。もし、そうでなければ、それは彼自身の責任であって、教師が責めを負うべきことではない (Veblen 1918, p 20)。ヴェブレン的大学の学生とは、探求すべき課題をすでに自覚した研究者の卵なのである。

さらにヴェブレンは学部 (under graduate) 段階で行われている一般教養に類する教育や、様々な実学・職業訓練に属するものを大学から切り離すべきだ、とも主張している。大学とは、「事物についての知識を獲得して、それを理解可能な体系に還元しようとする無私の傾向性 (disinterested proclivity)」(Veblen 1918, p 8) である「怠惰な好奇心 (idle curiosity)」につき動かされながら、事実と学理とをひたすら探求すべき場所である。ところが大学内部の実学の担い手たち (工学や農学を含めて) は、実用性・応用可能性に関心を抱いている。実際的な関心の介入は、知識の追求が自己目的であるべき大学人のまなこを曇らせる。また、学者気取りは専門技術者の技能と能力とを損なうものだ。大学という看板のもとに両者が一緒にいてもよいことは一つもない。だから大学と専門学校、純粋学問と応用学問とは、はっきりと分離した方がよい。ヴェブレンはそう述べている (Veblen 1918, p 31-2)。

こうしたヴェブレンの主張に対しては、次のような反論が予想される。西欧の大学は中世に起源をもつ。中世の大学においては、神学・医学・法学等の「実学」が中核をなしていた。大学は、僧侶・医師・法律家等を養成する職業訓練をその使命としていたのである。中世におけるそうした起源にとどまらず、近代以降の大学の歴史においても、ヴェブレンが理想とするような研究にのみ特化した大学は存在したためしがないではないか。

こうした批判に対するヴェブレンの反論は、以

下のとおりである。西欧の大学が、神学・医学・法学等々の実学の研究に従事し、職業訓練の場として発足したことは、単なる歴史的偶然に過ぎない。ヨーロッパ中世は、個人の魂の救済を至高の価値とするプラグマティックな文明に支配されていた。魂の救済という目的に貢献しない、いかなる制度もこの時代においては存続を許されなかったのである。神学を頂点とする実学の府としての装いをもつ伝統的な西欧の大学組織は、西欧中世文明のプラグマティックな性格に呪縛されたものだったのである (Veblen 1918, p 36)。しかし、ものごとの起源がそうだからといってわれわれはそこに回帰しなければならないわけではない。いまさら手工業の時代に戻ることができないのと同じ様に、実学中心の大学に戻ることはできない。ヴェブレンは言う。「歴史的論議は、事物がどこに行きつつあるのかについての知的評価を行うことを命じるものである。事物の始まりに回帰せよと命じるものではない」(Veblen 1918, p 33)。

他方、ヴェブレンは西欧の大学が担う一貫した性格をも強調している。西欧の大学は、「共同体のなかの至高の大望と理想とを育て、世話するための組織であり続けてきた」(p34)。西欧中世の至高の価値が魂の救済であったのに対して、近代文明の至高の目的は、知識の探求を行い、それを遍く普及させていくことである (Veblen 1918, p 18)。それ故、今日では大学においては純粋学問の追求が主流になってきている。否、プラグマティックな価値観が支配していた中世においてさえ、大学人は実学の装いのもとに純粋な学理の探求を行うことで、大学を「怠惰な好奇心」としてのある種のアジールとして、後年の科学の開花を準備したのである (Veblen 1918, p 21)。大学は実学の府から純粋学問の府へと進化しつつある。そうした認識がヴェブレンに、大学からの実学の追放を宣言させたのである。

ヴェブレンは、職業教育とともに、学部レベルで行われている一般教育の大学からの追放をも宣言している。ヴェブレンは中等教育と高等教育の厳密な区分を行っている。中等教育の役割は、市民生活のなかに子どもたちを導き入れることであ

る。他方、大学は科学と学問の生活に人間を特化させることをその目的としている。多くの人間に関わりをもつのは言うまでもなく前者、中等教育である。「市民であること (citizenship) は、学問を行うこと (scholarship) よりも、より大きくかつより本質的なカテゴリーである」(Veblen 1918, p 21)。よき市民としての資質の涵養と職業訓練とは、社会にとっては学問や科学よりも重要性の度合いは高い。そうであるならばなおさら、それらが学問研究の片手間になされてはならないとヴェブレンは主張している。

ここまでのヴェブレンの議論をまとめてみよう。ヴェブレン的の大学は、研究に特化したものである。そこでは教育でさえ、次世代の研究者の育成という副次的な意味をもつものでしかない。現代風に言えば基礎研究に従事する大学院部門のみが、ヴェブレンの意味での大学の名に値するものである。そしてヴェブレンのみるところ、アメリカの大学も職業訓練から研究へとその力点をシフトさせてきた。本書執筆時点ですでに、研究を行わない大学は大学とは認められなくなってきているとヴェブレンは述べている。19世紀の半ばに、「実用教育」の必要性を叫ぶ地方政治家たちの要求を容れて創設された各地の州立大学群でさえいまや研究重視の方向に進みつつある (Veblen 1918, p 43-4)。しかし、ヴェブレンのみるところアメリカの大学は、研究重視の理想的な方向から大きく逸脱する危険性をはらんでいる。ヴェブレンは、ピューリタンの聖職者に代ってアメリカの大学を支配するようになった、ビジネスマンたちの野望への、強い警戒心をあらわにしている。

## (2) 高等教育を支配するビジネス原理

本書のなかでヴェブレンは、20世紀初頭のアメリカの大学が、ビジネスマンによって支配されている有様を活写している。かつての聖職者たちと同様、現代のビジネスマンは意味もなく尊敬され、万能視されている。そのためビジネスマンたちは、州立であると私立であるとを問わず、大学の経営評議会 (governing board) のメンバーに選ばれ、予算配分や学長の選任等の大きな権限を

握っている。ところが彼らは、学問についてはまったくの門外漢なのだから、ビジネスマンが支配する経営評議会は、ただ高等教育を妨害するだけの存在なのである (Veblen 1918, p 69)。

大学は、巨大な財政基盤をもっている。ビジネスマンであればそうした組織の運営に慣れているだろう。それに富裕なビジネスマンたちは、大学が経営困難に陥った時には金銭的な援助を与えてくれるかも知れない。そして何よりも拝金主義の支配するアメリカ社会のなかで巨富を手にしたビジネスマンは至高の成功者なのである。「ビジネスでの成功は、ビジネスとは関係のない事柄をも包括した賢明さを証するものであると、一般には考えられている」(Veblen 1918, p 69)。彼らの実際的な手腕や財力以上に、アメリカ社会を支配しているビジネスマン信仰が、ビジネスマンが経営者として大学に迎え入れられた最大の理由なのである。こうして金銭的能力が経営評議会への参入資格とされるようになった。大学の最終的な意思決定機関は、本来高等教育とは何の関わりももたない者たちの手に落ちてしまったのである。

ヴェブレンは、アメリカ人のビジネスマン崇拝に嘲笑を浴びせている。ヴェブレンのみるところアメリカのビジネスマンは、知性と冒険心とを根本的に欠いている。ただ、臆病で抜け目なく狡猾な人たちなのである。冒険心と知性の欠如とは、アメリカ人一般の特徴ではない。アメリカの技術者や発明家、そして冒険家たちは、その優れた資質をいかに発揮してきた。しかし、彼らが巨富を手にすることは稀である。彼らは何かを創り出し、あるいは何かを発見すると、そのことに満足してその場を立ち去ってしまう。自らは何ら手を下すことなく、じっと彼らの活動を眺めていたビジネスマンたちが、彼らの手柄を横取りして、タナボタ式に巨富を得てしまうのである。ヴェブレンは、アメリカの格言を引用している。「豚は黙って残飯をむさぼる」(Veblen 1918, p 71)。

ビジネスマンたちは、実際的な効用を重視する彼らの思考習慣を大学にもちこみ、ロースクールやビジネススクールをアメリカ中に繁茂させていった。ヴェブレンはすべての実学を大学から排

除するよう主張していた。しかし、彼は実学の効用も大いに認めている。農学や工学の研究は科学の成果に多くを負っている。そして、何よりそれらは公共の福祉に寄与するものである (Veblen 1918, p 205)。しかし、ビジネスと科学とは、何のかかわりもない。またビジネスの世界のなかでは、他者の被る損害がおのれの利益となるのだから、ビジネスという営みはコミュニティの物質的な福祉の増大になんら寄与するものではない。ビジネスの才を豊かにもつものが増えれば、逆に貧しくなる者の数が増えるだけなのである。大学におけるビジネスの研究教育は、体育のそれと並んで百害あって一利なきものだとしてヴェブレンはきめてつけている (Veblen 1918, p 210)。

ヴェブレンは、ロースクールへの嫌悪感をも隠さない。法学教育は、中世の大学に位置を占めていたというだけの理由で、大学内部にとどまっている。法体系の基礎をなしている哲学的思弁については何も教えることなく、ただ実務と詭弁の訓練とに明け暮れるロースクールは、まったく大学に相応しくない存在である (Veblen 1918, p 211)。ヴェブレンはまた、弁護士という職業の社会的な有用性も認めていない。ヴェブレンのみるところ、弁護士の仕事もビジネスマンのそれと同様手のこんだ詐術なのである。有能な弁護士同士が争えば裁判はいつまでたっても決着がつかず、訴訟に要する費用は膨大なものになってしまう。だから、弁護士の数は少なく、その能力も低い方が「コミュニティの全体にとって役にたつ」 (Veblen 1918, p 212)。

規模拡大の野望をもつビジネスマンたちは、学問的な素養と関心をまったくもたない学生たちを大量に大学に受け容れていった。そうした学生たちを引きつけるために、スポーツや学生クラブのような「学生活動 (student activities)」が盛んになり、大学からは学問をする雰囲気が失われてしまう (Veblen 1918, p 102)。そしてやる気をもたない学生たちに勉学を強いるために、単位制度やカリキュラム、成績評価によって学生を管理する中等教育の手法がまず学部レベルに、そしていまやそれらは研究者養成の場である大学院にまで入

りこんできている。機械的で標準的な課業の強制は、自由で自発的な知の探求という大学本来の使命を著しく損なうものであるとヴェブレンは言う (Veblen 1918, p 109-110)。「親方」と「弟子」という表現が示しているように、高等教育のコアをなすものは、教師と学生のパーソナルな関係性であって、機械的に標準化されたシステムに還元するものではないというヴェブレンの認識が、ここでは示されている。

ビジネスマンは、大学を投資対象として考えている。しかし、いくら大学を企業に似た組織にしてみせたところで、両者はまったく異なる原理の上に立脚しているのである。研究は、研究者の自発性と固有の手順によって進められていく。学問的成果は、産業の世界におけるような機械的・統計的な画一性を強いることによって生み出されるものではない。「知的探求を成立させている人間の知性と自発性とを計量的に定式化することはできない。バランスシートにあらわすことはできないのである」 (Veblen 1918, p 86)。自発的な知の探求を権威主義的な強制や管理によって引き出すことは不可能である。学問は長い目でみない限り、そして研究者の自由な探求に委ねられない限り、顕著な成果は上がらない。ところがビジネスマンは、投資に対する短期的で金銭的に巨額な見返りを期待している。ビジネスマンが支配する大学は、その営利至上主義によって学問を台無しにしてしまうことを何よりもヴェブレンは危惧していたのである。

### 3. 化石としてのヴェブレン

#### (1) 奇妙な大学観

ヴェブレンの大学観は奇妙なものと言わなければならない。ヴェブレン自身が認めるように、職業教育や教養教育を完全に放擲してしまって、研究にのみ特化した大学が主流になったことなどこれまでの長い大学の歴史のなかで、一度もなかったからである。しかし、研究機能の重視という点で、ヴェブレンの大学像は19世紀に著しい発展をとげたドイツの大学の姿と酷似している。

『アメリカの高等教育』のなかでヴェブレンがドイツの大学に肯定的に言及している箇所は一つもない<sup>(2)</sup>。むしろ超国家主義的な信念に汚染されたドイツの科学者たちが、第一次大戦中に科学者としての道義を踏みにじり、科学の進歩にとって不可欠な科学者による国際連帯を台無しにしてしまったことを激しく論難している (Veblen 1918, p 49-50)。ヴェブレンの描く大学像に近い、研究に特化した大学院大学といえば当時のアメリカにはジョンズホプキンス大学があった。若き日のヴェブレンが学生として学んだこの大学は、ドイツ大学をモデルとしたものである。

ヴェブレンの描く大学像がドイツ的なものであることは疑いない。そしてヴェブレンの大学論は、カントの『学部争い』を彷彿とさせるものである。カントは3つの上級学部は下級学部としての哲学部の自由な知的探求の成果をもとに、それぞれの学問を発展させることができるとしていた。カントはその大学論において、実学（上級学部）と純粋学問（哲学部）との地位を逆転させたのである (Kant 1789 = 訳, 1973)。『アメリカの高等教育』のなかに、カントの大学論への言及を見出すことはできない。カントの倫理学の研究で学位を得たヴェブレンが、『学部争い』を参照せずに『アメリカの高等教育』を書き上げたとは考えにくい。純粋学問の応用学問に対する優位性を強調した点で、ヴェブレンとカントとは酷似している。大学を理性の、すなわち純粋学問の府であるとしたカントの視点をさらに徹底させたヴェブレンは、実学の大学からの追放という、カントよりもさらにラディカルな主張を行ったのである。

「怠惰な好奇心」に突き動かされる純粋学問と、プラクティカルな関心に支配された応用学問というダイコトミーが、ヴェブレンの学問分類のコアをなすものである。しかし、この両者の間にはっきりとした線を引くことは果たして可能なのだろうか。ヴェブレンの死後10数年の後に、アインシュタインのような優れた科学者が原爆製造に手を貸しているのだから。科学を進歩させることだけが、大学の使命なのだろうか。科学の成果が悪しき方向に応用され、暴走することを押し止め

る力を大学のなかに培っていく必要はないのか。これは『アメリカの高等教育』を読みながら筆者の抱いた率直な疑問である。

また、ヴェブレン的大学には、職業訓練のみならず「教養」や「文化」も占めるべき位置をもっていない。ヴェブレンは「学問」(scholarship)、「科学」(science)ということばは、その探求こそが大学の使命であるとして肯定的に用いている。それに対して、「博識」(erudition)は、否定的な概念でしかない。市民として必要とされる知識は、中等教育で身につけるべきものであり有用である。しかし、それを越えた過剰な「博識」や「教養」の獲得は、ただ有閑階級の金銭的能力を誇示する手段として用いられてきた見栄の産物に過ぎない (Veblen 1899 = 訳 1961, 360-1 頁)。研究重視という点で、ヴェブレン的大学とドイツ的大学とは重なりあうものである。しかし、大学人が生産した文化を獲得したものが、社会のなかで教養市民層としての地位を獲得していくという、フンボルトによって基礎を与えられた、教養とある種の功利性とを重んじるドイツ大学のもう一つの側面は、ヴェブレンにとって受け容れがたいものであったに違いない。

ヴェブレンは科学や学問の進歩に対して手放しの信頼を示している。進み過ぎた科学が暴走する事で人類に災いをもたらす。これは、60年代ラディカルたちの提起した問題であった。また C. P. スノウが文科系・理科系「二つの文化の対話」の必要を説いた背景には、そうした問題意識があったに違いない (Snow 1957 = 訳 1967)。自らの研究や技術開発の成果のもつ、社会的・文化的結果に自覚的な研究者や専門技術者を育てることは大学の重要な使命であろう。そして、自らの仕事の意味を問いつつ能力という意味に「教養」ということばを定義すれば、教養を機軸として研究と職業訓練とが統合される大学の像さえ描けそうである。しかし、そうした観点をヴェブレンの著作のなかに見出すことはできない。

ヴェブレンは、マルクスから大きな影響を受けている。しかし、マルクスが生産力の増大を重視したのに対して彼は、「思考習慣」の進歩こそが

人類社会の進歩であるという認識に立っていた（小谷：1988）。人々が機械過程を支配する非人格的な自然法則に親しみ、世界が何らかの超人格的存在の意思に支配されているという神人同型説的・アニミズム的信念から脱却すること。人々が「見栄」の心理から解放されて、生産効率を第一義とする「製作者本能」が全面開花すること。ウェーバー流に言い換えれば、「呪術からの世界解放」、あるいは「合理化」を導くような思考習慣の全面化こそが、ヴェブレンの意味での「進歩」に他ならない。「呪術からの世界解放」を推し進めるためには「知識の増殖と拡散」とは不可欠のものであり、それに掣肘を加える一切のものは排除されなければならない。こうした論理構成のなかでは、「科学の暴走」という問題意識など入りこむ余地はない。そして「進歩」への懐疑をも含みこんだ「教養」概念もまた、入りこむ余地などないのである。

## (2) ヴェブレンと60年代ラディカリズム

ヴェブレンは、C. W. ミルズに称賛されたことで、60年代ラディカルたちのなかで、ある種偶像的な地位を保っていた。カート・ヴォネガット・ジュニアもまた、60年代ラディカルたちの間にカルトの人気を誇った作家である。貧しい人たちに自分の持てるもののすべてを投げ与えてしまうヴォネガットの作中人物、若き大富豪エリオット・ローズウォーターは、自身の「サマリア症候群（弱者・持たざる者への過度の同情心によって精神の均衡を保てなくなる心の病）」治療のため、精神分析家の治療を受けている。そのカウンセリングに際して、彼は次のように述べている。ヴォネガットを苦しめているものは、彼の自我を支配し続ける父親の影響力などではなく、富める者が貧しいものを搾取しつづけて来た「アメリカの歴史」である。そして彼はこう述べている。「ソースタイン・ヴェブレンは、よく夢のなかに出てきますよ」（Vonnegut 1963 = 訳1973, 42-3頁）。

大学人の偽善的な生き方を嫌悪して、大学のなかでのドロップアウトとしてその終生を閉じ、ビ

ジネスを詐術と同一視する激烈なアメリカ文明批判を展開したヴェブレンは、60年代ラディカルたちにとって、もっとも心情的な同一化のしやすい思想家であったことは疑いない。他方、D・リースマンはヴェブレンから多くのものを学びながら、ヴェブレンに対する痛烈な批判を展開した論客でもある。ヴェブレンが、教育機能の大学からの放逐を主張したのは、彼が学生の名前を覚えることができず、朝起きて教室に行くことができないだらしない生活をしていた、要するに教師としての落ちこぼれであったからだ、とリースマンは言う（Riesman 1953, p 108-9）。ドロップアウトを志向し、男性性を嫌悪して女性的なるものを称揚したヴェブレンをリースマンは激しく批判した。ドロップアウト志向や女性的な価値の称揚は、50年代のビートニックやフラワーチルドレンなど60年代ラディカル先駆となった者たちの特徴である。リースマンがヴェブレンのなかに、アメリカの反抗する若者の姿を重ね合わせていたことは明かである。

しかし、ヴェブレンと60年代ラディカルたちの思想は簡単に等号で結べるものではない。

大学が科学の暴走に手を貸して、ヴェトナムでの殺戮に加担していたことが、60年代末の若者たちのラディカルな抗議行動を呼び起こす原因となったのである。他方、ヴェブレンは科学の進歩に対して極めてオプチミスティックな見方を示していた。そして、大学は科学研究に一意専心すべし、と主張したのである。ヴェブレンの極端なまでの主知主義と、研究を至高のものとするその大学観とは、60年代ラディカルたちとは異質なものだと言わなければならないだろう。

## (3) 「ビジネスマンの大学」から「国家の大学」へ—アメリカ大学の変貌

ビジネス原理によって支配され、様々な部門を包含して巨大化した結果、大学の本来の使命である科学や学問の探求が犠牲にされる。このヴェブレンの予言は、20世紀のアメリカの大学においては見事に外れてしまったという他はない。アメリカの大学は、ヴェブレンの勧奨に従って基礎的な

学問の研究に「一意専心」してきたわけでは決してなかった。学問研究に始まって、一般教育、職業訓練、スポーツ等各種の「学生活動」、さらには生涯学習の類までもを包含したアメリカの大学は、「マルチバーシティ」(C・カー)としての発展を遂げていったのである。そして、「マス化」からさらには「ユニバーサル化」へと、途方もない規模拡大の道を突き進んでいったことは周知のとおりである。「勉強をする意思をもたない学生」の大群を多く抱えこみ、ヴェブレンの嫌悪した教育過程の画一化と標準化、組織内部の官僚制的管理化もアメリカの大学のなかでは、極限的に推し進められていった。規模拡大と教育過程の画一的規格化という点において、アメリカの大学はまさにヴェブレンの憂慮した方向につき進んでいったと言える。しかし、にもかかわらず、アメリカの大学の学問研究の基盤が破壊される事態は起こらなかった。20世紀アメリカの大学が、ほとんどすべての学問領域において、世界を指導する位置に立っていたことに異論をはさむ者はいないであろう。この意味において『アメリカの高等教育』におけるヴェブレンの予言は、見事に外れてしまったのである。

ヴェブレンの死後、アメリカの大学は「ビジネスマンの大学」であることをやめ、「国家の大学」としての性格を強めていった。アメリカの大学の規模拡大に決定的な役割を果たしたのは、第二次大戦後の復員軍人援助法案(G. I. bill)である。このことが示すように、20世紀アメリカの大学は、若年労働力をプールする事によって失業率を調整するという、ケインズ型福祉国家における新たな役割を担うようになった。これは大恐慌の年に生涯を閉じたヴェブレンのまったく予期しなかったことであろう。そして、20世紀のアメリカにおいては、科学技術こそが巨富を生み出す源泉となっていたのである。科学研究のセンターとしての大学には、経済を発展させる起動力としての役割が担わされていく。ヴェブレンは『アメリカの高等教育』において、中産階級的な偏見に支配され、自然科学のように偶像破壊的であるよりはむしろ、支配階級のための政策提言を行う御用学問

としての性格を色濃くもつ社会科学への嫌悪感を露にしている(Veblen 1918, p 186-90)。ヴェブレンが嫌悪してやまなかった、社会科学の保守的な性格の故であろう。第二次大戦後のアメリカでは、多数の社会科学系の大学知識人が、政策立案とプロパガンダのための要員として、ワシントンに送りこまれていったのである。このように20世紀アメリカの大学は、高度な産業社会の有機的な構成要素となっていた。大学の存在は、アメリカ社会全体に大きな影響を与える、まさに国家的関心事なのである。そうした大学をビジネスマンが、利己的な関心のために利用することなど許されるはずもない<sup>3)</sup>。

こうして第二次大戦後アメリカの大学には、おしげもなく国費が投じられるようになっていった。第二次大戦後のアメリカにおいては、一人の大金持ちの支配する大学などどこにもなく、連邦政府など官界の資金が大学の経済的基盤を支えるようになったのである(中山1994, 69頁)。20世紀アメリカの大学を発展させる力となったのは、ヴェブレンの時代のようなビジネスの論理ではなく、実は国家の論理であったと言えるであろう。とりわけ冷戦時代にアメリカ国家は、その実践的な価値だけではなく国家の威信のために、惜しげもなく巨費を大学に投下していった。そのことが、短期的な実利をおよそ期待できないような基礎的な学問研究をも含む、アメリカの大学の研究面での隆盛を招いたのである。

ヴェブレンは、『アメリカの高等教育』において、「国際化」こそがアメリカの大学の喫緊の課題であるとして、次のように述べている。ヨーロッパの大学の没落に伴い、アメリカの大学は、世界の学問を主導する位置に立った。ヨーロッパの科学者の世界は、優れた人材の多くを第一次大戦で失い、戦争のもたらした憎悪によって研究者同士の国際協調も破壊されてしまったのである。アメリカは世界の学問の中心地となったことを自覚して、戦略的な行動をとるべきだ。そうヴェブレンは指摘している。アメリカは窮乏状態におかれた世界の研究者に対して、様々な形で支援を行うべきである。またアメリカの大学は、世界の



研究者たちの交流センターとしての役割を果たすべきだとヴェブレンは述べている（Veblen 1918, p 51-5）。

このヴェブレンの提言は、もちろんすぐに実現されることはなかった。しかし、第二次大戦後のアメリカの大学が、目覚ましい国際化をとげていったことは周知のとおりである。フルブライトをはじめとする奨学資金によって、アメリカは世界の研究者への物質的援助を惜しまなかった。そして、恵まれた研究環境と斬新な研究を奨励する自由な空気によって、アメリカの大学は世界の優れた知性を引き付けてやまなかった。20世紀とりわけ第二次大戦後のアメリカの大学は、ヴェブレンの勧告を忠実に実行したのである。ヴェブレンが『アメリカの高等教育』をあらわした当時、アメリカはウイルソン大統領が創設した国際連盟への加入を拒否するほどの孤立主義に支配されていた。しかし、第二次大戦後、冷戦構造下のアメリカの大学は、世界の覇権国家としての自覚の下に行動するようになっていたのである。そのアメリカの国家意識の変化も、アメリカの大学の「国際化」を可能にした一つの大きな要因といえるだろう。

#### 4. よみがえるヴェブレン

##### (1) 醜悪な日本の大学

ヴェブレンの大学批判は、20世紀アメリカの大学の実態をみる限りでは、もはやアクチュアリティを失い過去のものとなってしまったと言わなければならない。しかし、21世紀の、とくに日本の大学の現状はまさにヴェブレンが批判してやまなかった20世紀初頭の醜悪なアメリカの大学像と酷似したものになってきている。もちろん、当時のシカゴ大学のように、個人の大金持ちによって支配される大学などいまの日本にはあるはずもない。しかし、ヴェブレンの批判がいまの日本の大学に妥当する部分は以下にみるように、驚くほど多いのである。

すでにみたとおりヴェブレンは、実学とその担い手たちが幅をきかせることによって、大学がプ

ラクティカルな関心に支配され、「怠惰な好奇心」に導かれた学理の追求という本来の使命が損ねられることへの危惧を表明していた。90年代に文部科学省は、「大綱化」という名の規制緩和を行った。その結果、とくに私学において、新しい大学や学部が叢生していったのである。そうした新しい学部や学科は大学受験市場の歓心をかうべく、プラクティカルな性格のものが多くを占めていた。この結果、大学には様々な分野のプロフェッショナルが大量に入りこんできたのである。このことは、学問の府としての大学の性格を曖昧なものにしてしまった。そして、大学教授職の定義さえいまや困難なものになりつつある。何しろ学術論文など書いたことすらない、「教授」の存在さえ珍しくはないのだから。

そしてヴェブレンが重視した、中等教育と高等教育の間の区別も、この国では溶解しつつある。大学進学率の上昇に伴って、修学の意欲と基礎的な学力とに欠ける学生が大量に大学に入りこんできている（「分数のできない大学生」!）。そうしたレベルの学生を排除していたのでは、もはや経営が成り立たない私大も少なくはない。こうした学生のために、高校（あるいはそれ以下）レベルの補習授業を行う大学も増えてきている。「大学レジャーランド化」は一時代前の流行語だが、いまや学生の幼稚化も顕著なものとなってきている。教師や事務職員が学生の「生活指導」を行うケースも稀ではない。ヴェブレンは、「大学」と「学校」の違いを強調したが、この国の大学は、高校以下の「学校」と見分けのつかないものになりつつある。

ヴェブレンが学問の府としての大学にとっての根本的な脅威とみなしていた、ビジネスの論理の大学への浸透も、現在確実に生じてきている。この傾向はとくに私立大学において顕著なものであるといえよう。ある有名私大は、ビジネスマンを理事者に迎えることで経営を立て直しを図っている。企業の格付け会社が大規模私立大学の外部評価を行うことは、一つの流行にさえなっている。私立大学ばかりではない。石原東京都知事の「首都大学東京」構想は、都立大学の担っていた基礎

的な研究領域をリストラしてしまっ、プライテクナルな研究と教育とに特化した新しい大学を生みだそうとしたものである。大学人がヴェンチャー企業を立ち上げる事は無条件に善きこととされている。大学と企業とを同一視する思考習慣。学問を営利事業と同一視して、短期間に巨額の見返りを期待すること。ヴェブレンが学問の破壊につながると危惧した事態が、21世紀のこの国の大学のなかでは進行しているのである。

(2) よみがえるヴェブレンー大学の廃墟のなかで  
しかし、ヴェブレンの予言が21世紀になって蘇ってきたのは、日本だけに限らない。「費用」対「効果」の説明責任 (accountability) の見地から、人文学のみならず物理学のような基礎的学問全般がアメリカでもリストラの対象となっている。ビル・レディングスは、フンボルト的な「文化の大学」の死を宣言している。アメリカをはじめとする20世紀の諸国家は、ナショナル・アイデンティティの拠り所として、またエールフランスのようなナショナル・フラッグがそうであったような国威発揚の道具として、人文学や基礎的な諸学問に大量の資金を投下し、これを支えてきた。しかし、経済のグローバル化のなかで国家はその経済的・文化的な求心力を著しく低下させてしまった。国民生活を支配する力をもつものは、いまや国家ではなくグローバル化した企業群なのである。また国家財政の破綻のなかで大学を経済的に庇護するゆとりも国民国家からは失われていく。企業等が提供する外部資金に頼らなければ大学「生き残り」は困難なものになってしまったのである。そこで大学はこれまでの「文化の大学」から、あらゆる点での卓越性の証明を求められる「エクセレンス」の大学となった。「エクセレンス」は、企業の歓心を買うべく会計のことばで表現されなければならない (アカウンタビリティ) ののである (Readings1996 = 訳1999)。

この「文化の大学」から、「エクセレンス」の大学への推移というレディングスの議論を論者の文脈に当てはめれば、「国家の大学」が再び「ビジネスマンの大学」に回帰したと言えるであろ

う。21世紀の大学が「ビジネスマンの大学」に回帰したのであれば、それがヴェブレンの予言したとおりの醜惡な姿をとることについては、何の不思議もなくなるのである。

冷戦下の20世紀諸国家は、「進歩の神学」を正統性の原理としていた。冷戦とは、社会主義と資本主義のいずれの側に未来があるのかが争われていた戦いだったからである。進歩を保証するものは科学であり、知識である。それ故、冷戦時代においては、「知識の増殖と拡散」が絶対的な価値をもち、その担い手としての大学の役割に疑問をはさむ者はいなかった。大学を主要な舞台として生じた60年代の若者の反乱は、その意味で冷戦構造のゆらぎを示すものであったと言えるであろう。中世の大学がキリスト教神学に奉仕するものであったとすれば、20世紀の大学は、「進歩の神学」に奉仕するものだったのである。しかしソ連崩壊とともに冷戦が終わる。フランシス・フクヤマは、「歴史の終焉」を宣言した。歴史が終わったのだとすれば、「進歩の神学」もまたナンセンスなものでしかなくなってしまふ。冷戦後のすなわち21世紀の世界において、「進歩の神学」の殿堂である大学が「廃墟」と化してしまった所以である。ヴェブレンの信奉していた「進歩の神学」が過去のものとなってしまったと同時に、彼の大学批判がアクチュアリティーを取り戻したことは、皮肉という他はない。

ヴェブレンの手放しの科学礼賛は、核戦争と環境破壊の20世紀を通過したわれわれにとって到底首肯しうるものではない。研究機能にのみ特化したヴェブレン的大学もまた然りである。科学の暴走を押し止めるためには、自らの研究の意味を広い文脈のなかで捉えるという意味での「教養」ある研究者の存在が求められよう。そして、大学はよくも悪くも知的エリートだけのものではなくなっている。科学技術の進歩とビジネスの発展とがもたらす変化の波に翻弄されることなく生きる力としての「教養」をエリートならざる学生たちに授けることも、大学の重要な使命になっているのではないだろうか。それをもヴェブレンは、大学と中等教育の区別の喪失、すなわち

大学の墮落ととらえるのであろうが。

たしかにヴェブレンの大学論は、いくつかの難点を抱えている。しかし、学問研究は研究者の心のおもむくままの自由な知的探求にのみ導かれるものであって、一切の数量的な管理や統制になじむものでもなければ、経済的な見返りをそこに求めるべきものでもないというヴェブレンの言に有効な反論をなしうるものもないのではないか。高等教育へのビジネス原理の浸透に対するヴェブレンの批判は、やはり正しいのである。学問的成果は、工業製品のように規格大量生産可能なものではない。それは「怠惰な好奇心」に導かれた研究者個人のパーソナルな営みなのである。

すでにみたようにリースマンは、ヴェブレンは教師失格者だったから、大学からの教育機能の放逐を主張したのだと意地の悪い見方をしていた。しかしリースマンは本当に正しいのだろうか。ヴェブレンが、カリキュラムのなかに位置づけられ、標準的な内容と学生への数値による評価を求められる通常の授業（講義とゼミナール）の手を思い切り抜いていたことは間違いない。しかし、それは、彼の教師としての無能さや熱意の欠如を示すものなのだろうか。高等教育における知の探求は機械的標準化におよそ馴染むものではなく、教師と学生のパーソナルな関係性のなかでのみ実りを生むものであるという彼の信念に基づく行動だったのではないか。教室のなかでのヴェブレンは、終生エキセントリックな教師を演じ続けた。しかしパーソナルな関係性において彼が、学生や若い研究者を気遣い、適切な助言で彼らの研究をインスパイヤしていたことはドルフマンの浩瀚な評伝を読んでも明かである。いつの時代にも高等教育の真髄はシステムにではなく、研究者と学生のパーソナルなふれあいのなかにこそある。そうしたメッセージを『アメリカの高等教育』とヴェブレン自身の生き方とは、愚かな「改革」の波にあらわれ翻弄されているこの国の大学人に投げかけているのではないだろうか。

## 註

- (1) この論文は、平成16年度日本社会学会史学会大会（6月26日@日本女子大学西生田キャンパス）における同名の研究報告に加筆したものである。発表当日フロアから、石塚省二（東京情報大学）、藤田弘夫（慶応義塾大学）両先生から貴重なコメントを頂いた。そのコメントの内容はこの論文の記述に大いに反映されている。お二人に対して、謝意を表するものである。

なお本研究においてテキストとして用いた（Veblen, 1918）は、*The collected works of Thorstein Veblen* Routledge/Thoemmes Press の Vol.4 である。

- (2) ヴェブレンは、世界平和の霍乱要因としてのドイツに対する反感を隠さなかった（Veblen, 1915）。ヴェブレンのドイツ批判については、稿を改めて詳述することにした。
- (3) 20世紀的・アメリカ的資本主義の発展に果たした大学の役割については、（関，1985）を参照した。

## 参考文献

- Diggiins. J. P (1995) *Torstein Veblen* Princeton.
- Dorfman. J (1934) *Thorstein Veblen and his America* = 八木甫訳 (1985)『ヴェブレンーその人と時代』 HBJ 出版局。
- Kant. I *Der Kampf Von Faculties* (1798) = 小倉志祥訳 (1973)『学部争い』理想社版カント全集 第13巻。
- 小谷敏 (1988)「進化・行動・思考習慣—ヴェブレン研究序説」(『地域総合研究』第16巻1号 鹿児島経済大学地域総合研究所)。
- 中山茂 (1974)『大学とアメリカ社会』朝日選書
- Riesman. D (1953) *Thorstein Veblen—A Critical Interpretation* Seabury.
- 関曠野 (1985)『資本主義—その過去・現在・未来』影書房。
- Snow. C. P (1957) *The Two Cultures and Second Look* = 松井卷之助訳 (1967)『二つの文化と科学革命』みすず書房。
- Veblen. T (1899) *The Theory of the Leisure Class* =

小原敬士訳 (1961) 『有閑階級の理論』岩波新書

－ (1915) *Imperial Germany and the Industrial Revolution*.

－ (1918) *The Higher Learning in America*.

Vonnegut. K (1965) *God Bless You. Mr. Rosewater*

= 浅倉久志訳 (1973) 『ローズウォーターさん、あなたに神のおめぐみを』早川 SF 文庫。